



11/5

# Sachio FUJIOKA

Conductor

藤岡幸夫  
指揮

©Shin Yamagishi

日本指揮者界の重鎮であった渡邊暁雄最後の愛弟子。ゲオルグ・シオルティのアシスタントを務める。

英国王立ノーザン音大指揮科卒業。1992年最も才能あるEU加盟国の若手指揮者に贈られる「チャールズ・グローヴス記念奨学賞」を日本人にもかわらず特例で受賞。1994年にロンドン夏の風物詩「プロムス」にBBCフィルを指揮してデビュー以降、多くの海外オーケストラに客演。首席指揮者を務める関西フィルとは2024年に25年目のシーズンを迎え、2019年からは東京シティ・フィル首席客演指揮者も務める。番組立ち上げに参画し指揮・司会として関西フィルと共に出演中のBSテレ東『エンター・ザ・ミュージック』（毎週土曜朝8:30）は2023年10月に10年目に突入、放送500回に迫る人気番組。CDに関西フィルとのシベリウス交響曲全集（ALM RECORDS）、著書に『音楽はお好きですか?』（敬文舎）など。2002年渡邊暁雄音楽基金音楽賞受賞。

公式ファンサイト <http://www.fujioka-sachio.com/>

Following his debut with BBC Philharmonic in November 1993, Fujioka made his debut in the London summer tradition “BBC PROMS” conducted BBC Philharmonic in 1994. In 2001, he was appointed Principal Conductor of Kansai Philharmonic and now in his 24th season as Principal. In 2019, he was appointed as Principal Guest Conductor of Tokyo City Philharmonic. He also appears in TV program “Enter the Music” since October 2014. (BS TV TOKYO every week on Saturday from 8:30a.m.)

# T 都響・八王子シリーズ

Hachioji Series

TMSO

J:COMホール八王子

2023年 11月5日(日) 14:00開演

Sun. 5 November 2023, 14:00 at J:COM Hall Hachioji

指揮 ● 藤岡幸夫 Sachio FUJIOKA, Conductor

ピアノ ● 福間洸太郎 Kotaro FUKUMA, Piano

コンサートマスター ● 山本友重 Tomoshige YAMAMOTO, Concertmaster

## ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第3番 八短調 op.37 (36分)

Beethoven: Piano Concerto No.3 in C minor, op.37

I Allegro con brio

II Largo

III Rondo: Allegro

休憩 / Intermission (20分)

## チャイコフスキー：交響曲第4番 へ短調 op.36 (44分)

Tchaikovsky: Symphony No.4 in F minor, op.36

I Andante sostenuto - Moderato con anima

II Andantino in modo di canzona

III Scherzo: Pizzicato ostinato. Allegro

IV Finale: Allegro con fuoco

主催：公益財団法人東京都交響楽団

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演(青少年と保護者をご招待)

協賛企業・団体はP.59、募集はP.62をご覧ください。





# Kotaro FUKUMA

Piano

福間洸太郎

ピアノ

©Koutarou Washizaki

20歳でフリーヴランド国際コンクール日本人初の優勝およびショパン賞受賞。

パリ国立高等音楽院、ベルリン芸術大学にて学ぶ。これまでにカーネギーホール、リンカーンセンター、サントリーホールなどでのリサイタルのほか、フリーヴランド管、イスラエル・フィル、N響など著名オーケストラと多数共演。CDは『バッハ・ピアノ・トランスクリプションズ』（ナクソス）などをはじめ多数録音しており、2023年4月21日にはNAXOS JAPANより19枚目のCD『幻想を求めて―スクリャービン&ラフマニノフ』をリリースした。また、ラジオのパーソナリティや自身のYouTubeチャンネルでは、演奏動画、解説動画、ライブ配信などで幅広い世代から注目されている。多彩なレパートリーと表現力、コンセプトチャルなプログラム、また5か国語を操り国内外で活躍中。テレビ朝日系『徹子の部屋』や『題名のない音楽会』、NHK-TV『クラシック音楽館』などにも出演。第39回日本ショパン協会賞受賞。

公式サイト <https://kotarofukuma.com/>

公式ファンクラブ <https://shimmeringwater.net/>

Kotaro Fukuma studied at Conservatoire National Supérieur de Musique et de Danse de Paris and Universität der Künste Berlin. In 2003, at the age of 20, he won both the First Prize and the Chopin Prize at 15th Cleveland International Piano Competition. Fukuma has performed in major concert venues, including Carnegie Hall, Lincoln Center, Wigmore Hall, Gewandhaus, Salle Gaveau, and Suntory Hall. He has performed with orchestras including Cleveland Orchestra, Israel Philharmonic, Finnish Radio Symphony, Dresden Philharmonic, Orchestre National du Capitole de Toulouse, and NHK Symphony under batons of conductors such as Tugan Sokhiev, François-Xavier Roth, Hannu Lintu, Juanjo Mena, and Kazuki Yamada.

## ベートーヴェン： ピアノ協奏曲第3番 ハ短調 op.37

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)は生涯で番号付きのピアノ協奏曲を5つ残しているが、この作品のみ短調で書かれており、異例の位置を占めている。

ここで、ハ短調という調性の意味について考えておこう。少なくとも19世紀前半までのヨーロッパの美学においては、それぞれの調性は各々異なる意味合いを具えていると考えられていた。中でもハ短調は、悲劇性や闘争を象徴する調性だったのである。

じっさい、当ピアノ協奏曲を作った当時のベートーヴェンは、終生抱え込むこととなる耳の病と闘っている最中だった。また遠くフランスでは、ナポレオン・ボナパルト(1769～1821)が第一統領に就任して権力を掌握。ベートーヴェンも熱狂したフランス革命の思想をヨーロッパ中に広めることを錦の御旗に、各地で快進撃を繰り広げていた。このような公私にわたる“闘いの時代”に、それを端的に象徴する調性をベートーヴェンは最新のピアノ協奏曲に持ち込んだ。そしてこれは、非常に思い切った決断ではなかったか？

ピアノ協奏曲は元来、ピアニストがオーケストラをバックに自らの腕前を披露するためのジャンルだった。というわけで古典派の協奏曲では、たとえば第1楽章においてまずはオーケストラが前座のようにメロディを奏でた後、独奏ピアノが花道を通るがごとくやおら登場するといった形式も、ピアニストこそが主役であるという考え方を如実に反映したものに他ならない。そしてこの形式はあまりにも説得力があったため、ベートーヴェンの当協奏曲ですら、それに則って書かれているほどである。

ただし従来型のピアノ協奏曲においては、ピアニストの腕前を華々しく強調するという目的のゆえ、長調を基本とする煌びやかで派手やかな曲想がよしとされていた。そうした風潮の中にあって、ベートーヴェンはあえて短調、それもハ短調という調性を導入した。ちなみに協奏曲に短調を導入した有名な先例は、彼の先輩にあたるモーツァルトだが、いわばその路線を継承・拡大したのがピアノ協奏曲第3番だったといえよう(当協奏曲でこのジャンルに大きな価値転換をもたらしたベートーヴェンは、続くピアノ協奏曲第4番・第5番《皇帝》においては、曲の冒頭からピアノを登場させたり、オーケストラにピアノと同等の主張を行わせたりといった具合に、さらなる斬新な世界を築き上げていった)。

第1楽章はアレグロ・コン・ブリオの表記の下、2分の2拍子、つまり闘争性を帯びた行進曲を想起させる拍子に乗って、ソナタ形式に基づくハ短調の激しい音楽が奏でられる。第2楽章は対照的にラルゴ(ゆったりと)と指定され、8分の3拍子に基づく瞑想と慰めに満ちたホ長調の曲想が複合三部形式で交差する。第3楽章は再び2拍子(ただし4分の2拍子)に戻り、アレグロ指定の下、ロンド形式で短調

や長調の部分が激しく切り結んだ後、最後は急速なテンポで輝かしいハ長調が響きわたる。

このように全体としてはハ短調を基本としているものの、そこに長調の楽想が時には勇壮に、時には優しく絡むことで、ベートーヴェンが闘いの中で掴み取ろうとしていた希望や、悩み多い日々の中で夢見た希望が明滅する。そうした意味で、当曲は古典派の協奏曲の様式にぎりぎりで踏みとどまる一方、作曲家の情熱や感情が至るところにほとばしる作品として、19世紀のロマン派のピアノ協奏曲への道を切り開いた存在といえるだろう。

(小宮正安)

作曲年代：1796～1803年

初 演：1803年4月5日 ウィーン アン・デア・ウィーン劇場 作曲家独奏

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

## チャイコフスキー： 交響曲第4番 ヘ短調 op.36

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は、1877年12月（ロシア旧暦／以下同）に書き上げた交響曲第4番をナジェジダ・フォン・メック（1831～94）に捧げている。鉄道王の妻として亡くなった夫の莫大な遺産を相続した彼女との間には、1876年の暮れに文通が始まった。1890年までメック夫人から毎年巨額の資金援助を受けていたが、実際に会うことは一度もなかったという不思議な関係である。ともかくこれで創作活動に弾みがついたことは疑いなく、1877年5月初旬の時点で交響曲第4番は第3楽章までスケッチが進み、並行して歌劇『エフゲニー・オネーギン』まで着手をみていた。

チャイコフスキーがわずか2ヵ月で破綻する不幸な結婚生活を経験したのは、その直後のことだ。ごく短期間だがモスクワ音楽院で教え子だったと称する（彼は覚えていなかったらしい）アントニーナ・ミリュコーヴァ（1848～1917）という女性から3月に求愛の手紙が舞い込んだ。5月20日に初めてデートして3日後に婚約、7月6日に挙式という“スピード婚”に踏み切った理由は謎でしかない（彼は同性愛者だったという説も根強いだけに、ことさらに疑義の念がつのりもしよう）。

結局のところ、夫妻はわずか3週間で別居状態となり、チャイコフスキーは妹の嫁ぎ先のウクライナのカメンカへ身を寄せる。9月にモスクワへ戻ってからアントニーナと過ごした12日間をもって、両者の関係は終了を迎えた。精神的に追い詰められた彼がモスクワ川に腰まで浸かり、“肺炎か何かを患って死のうと考えていた”ところを、通りがかりの人に助けられたという有名な逸話も、同時期のものとして伝

わっている。こうした経緯を経た後、弟や友人の助力によりロシアを離れたチャイコフスキーは、スイスやウィーンやヴェネツィアの地で交響曲第4番の筆を進め、12月にイタリアのサン・レモでスコアが完成に至った。

初演の1週間後にメック夫人へ宛てた手紙の中で作曲者はこれを「私たちの交響曲」と呼び、各楽章の標題的内容について語っている。

**第1楽章 序奏(アンダンテ・ソステヌート)**で鳴りわたる動機は、その文面によれば“作品全体の種子”であり、“幸福を望む我々の前に立ちはだかる運命”を表す。楽章主部(モデラート・コン・アニマ)は構えの大きいソナタ形式。ワルツのリズムで哀しげな歩みを続ける第1主題は“その力の前に我々は嘆くことしかできない”という言葉と呼応するものだろう。木管楽器のソロで始まる第2主題部では“現実から逃避した空想”が“魂を甘く包み込む”。楽章全体を貫くのは“人生のすべては辛い現実とはかない夢の連続。安息の場はない”というテーマだ。

**第2楽章 アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ** “過去の追憶が様々な形でよぎる、その哀しさと心地よさ”を、メランコリックな主部と動的な中間部を対置させながら描いていく。

**第3楽章 スケルツォ/ピッツィカート・オスティナート/アレグロ** 指先で弦を弾く弦楽器のアンサンブルが“ほろ酔い気分の頭に明滅するイメージ”を視覚化。管楽器が加わる中間部は“遠くを通り過ぎる軍楽隊”の調べだ。

**第4楽章 フィナーレ/アレグロ・コン・フォーコ** 祝祭的な第1主題と、ロシア民謡「野に白樺の樹が立っていた」を用いた第2主題が交替する形で進み、“運命の動機”の劇的な回帰を経て、勝利の凱歌にも似たコーダで閉じられる。“心に喜びが見出せないなら、民衆の中に身を置き、他人の喜びを自分のものとせよ”という人生肯定的な口調のフィナーレ。

(木幡一誠)

作曲年代：1876～77年

初演：1878年2月22日(ロシア旧暦2月10日) モスクワ  
ニコライ・ルビンシテイン指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、弦楽5部

Program notes by Robert Markow

## Beethoven: Piano Concerto No.3 in C minor, op.37

**I Allegro con brio**

**II Largo**

**III Rondo: Allegro**

Ludwig van Beethoven: Born in Bonn, December 16, 1770; died in Vienna, March 26, 1827

Beethoven considered this work the best of his first three piano concertos, a judgment still maintained today by most listeners. Yet its premiere in Vienna on April 5, 1803, was hardly auspicious. It marked Beethoven's first public failure as performer and composer. The music was not appreciated and his playing of the solo part was criticized, perhaps understandably in light of the situation described by Beethoven's friend Ignaz von Seyfried, who turned pages: "I saw almost nothing but empty leaves; at the most on one page or the other a few Egyptian hieroglyphs wholly unintelligible to me, scribbled down to serve as clues to him."

In any event, though, Beethoven was certainly in august company. Three different noblemen attended in one capacity or another: Prince Lichnowsky, who fed the orchestra at the final rehearsal, which began at eight in the morning on the day of the premiere and lasted most of the day amidst a mood of utmost panic and short tempers; Prince Louis Ferdinand of Prussia, to whom Beethoven dedicated the concerto; and the aforementioned Ritter (knight) von Seyfried. Also on the program of this enormous concert were two more Beethoven premieres – the Second Symphony and the oratorio *Christ on the Mount of Olives* – as well as the First Symphony.

Although laid out in the traditional three-movement format of fast-slow-fast, this concerto departs somewhat from previous concerto style, particularly in its emotional depth and drama (qualities always associated with the key of C minor for Beethoven), and in the intricacy of interaction between soloist and orchestra. The opening orchestral passage is the longest of any Beethoven concerto, and is outstanding for its urgency and sense of reserved power. A second theme in E-flat major, lyrical and flowing, provides contrast of mood as well as of tonality. Both piano and orchestra develop these themes with considerable complexity.

The second movement, in the remote key of E major, is characteristically slow, reflective and deeply moving. Sir Donald Francis Tovey calls it "the climax of Beethoven's powers of solemn expression in his first period," and to musicologist Richard Rodda it is "one of the most Romantic pieces that Beethoven ever composed." Soloist and orchestra are more often heard individually than together. In fact, aside from the central episode, where the piano serves purely as accompani-

ment to the dialogue between solo flute and bassoon, piano and orchestra join in fewer than twenty bars. The soloist announces the sublimely beautiful, hymn-like subject in a twelve-bar solo, which is then repeated by the orchestra in its richest sonorities. The piano initiates the second paragraph, and only afterwards do piano and orchestra begin to mingle.

In the finale, Beethoven combines elements of both rondo and sonata form: rondo in the alternation of the initial theme with other material, sonata in the contrast of two tonal areas, C minor and E-flat major, the latter presented as a descending scale to a merrily “skipping” rhythm. Startling harmonic sidesteps, a short fugal development, a brief cadenza and a *presto* coda all contribute to the sustained interest in this movement, one imbued throughout with verve, vigor and rhythmic energy.

## Tchaikovsky: Symphony No.4 in F minor, op.36

- I Andante sostenuto - Moderato con anima**
- II Andantino in modo di canzona**
- III Scherzo: Pizzicato ostinato. Allegro**
- IV Finale: Allegro con fuoco**

Piotr Ilyich Tchaikovsky: Born in Votkinsk, May 7, 1840; died in St. Petersburg, November 6, 1893

Love, grief, crisis, and destiny were favorite themes of the nineteenth-century Romantic composers, and nowhere in Tchaikovsky’s life do they occur more dramatically than in the year 1877. This was the year in which he became involved with a neurotic young music student named Antonina Milyukova, made the disastrous mistake of marrying her, separated just ten days later, attempted suicide shortly thereafter, and, concurrently with all this, entered into that extraordinary relationship with Mme Nadezhka von Meck, the wealthy patroness whom Tchaikovsky was never to meet but with whom he exchanged what is perhaps the most famous body of correspondence in the history of music. In 1877 he also wrote his Fourth Symphony. Unavoidably bound up in its creation were the external events of that fateful year.

Tchaikovsky admitted to Mme von Meck that the whole affair with Antonina had been a farce, and that she was “a woman with whom I am not the least in love.” Fate was to blame for bringing them together, he firmly believed. The first performance took place in Moscow on February 22, 1878, with Nicolai Rubinstein conducting.

An imperious, strident fanfare opens the symphony. This motif has often been linked to “Fate,” and reasserts itself at significant structural points throughout the



movement. Following the fanfare introduction, violins and cellos present a sad, languid line, *in movimento di valse*, full of pathos, gloom, and rhythmic irregularities, rocking restlessly back and forth, sliding downward in bleak despair, then upward in renewed hope. Woodwinds then repeat the long theme. Tchaikovsky's love of contrasts can be observed in the second theme, introduced by the clarinet and continued by the cellos. Here the rhythm is more secure, the melody more tuneful, the mood lilting and comforting. The harsh reality of fate has been replaced by tender visions and dreams.

To offset the harrowing dramas and intense turbulence of the long first movement, Tchaikovsky follows it with music of lonely melancholy and nostalgia. His choice of the plaintive sound of the oboe to present the principal theme represents still another example of his sure mastery of tone color.

The Scherzo brings a completely new sonority – the entire string section playing *pizzicato* (plucked) in an effect reminiscent of a balalaika orchestra. This *moto perpetuo* is suddenly interrupted by an oboe playing a tune that suggested to the composer the ditty of a drunken sailor. Then comes still a third timbral block, the brass, softly intoning military music as if from the distance (Tchaikovsky's description).

Anyone who has dozed off during the Scherzo is going to be rudely awakened by the finale's explosive, brashly sensational opening. The second idea is presented almost immediately by the woodwinds – a variant of a popular Russian folksong. The festive mood returns for the third theme, a quick, march-like affair hammered out by the full orchestra accompanied by plenty of drums and cymbals. Tchaikovsky repeats, develops and combines these three ideas in multifarious ways. The movement's irresistible momentum pauses only long enough for an intrusion of the "Fate" motif. But this is quickly dispelled, and the symphony roars to a deliriously joyful conclusion.

**Robert Markow's** musical career began as a horn player in the Montreal Symphony Orchestra. He now writes program notes for orchestras and concert organizations in the USA, Canada, and several countries in Asia. As a journalist he covers the music scenes across North America, Europe, and Asian countries, especially Japan. At Montreal's McGill University he lectured on music for over 25 years.

11/12 11/13

# John AXELROD

Conductor

ジョン・アクセルロッド

指揮



©Marc Roger

1988年ハーヴァード大学を卒業。指揮をレナード・バーンスタインとイリヤ・ムーシンに学んだ。

ルツェルン響・歌劇場の音楽監督兼首席指揮者、フランス国立ロワール管音楽監督、スペイン王立セビリア響音楽監督、ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ響首席客演指揮者、京響首席客演指揮者を歴任。2009～2011年にウィーン・コンツェルトハウスでのウィーン放送響との映画音楽ガラ・コンサート「ハリウッド・イン・ウィーン」の音楽監督も務めた。2022/23年シーズンよりブカレスト響首席指揮者。都響とは2021年12月に初共演、今回が3度目の登壇となる。

これまでにバイエルン放送響、ベルリン放送響、NDRエルプフィル（北ドイツ放送響）、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、パリ管、ロンドン・フィル、フィルハーモニア管、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、ロイヤル・ストックホルム・フィル、オスロ・フィル、スウェーデン放送響、ザルツブルク・モーツァルテウム管、ワシントン・ナショナル響、ロサンゼルス・フィル、フィラデルフィア管、シカゴ響など、150以上の世界各地のオーケストラを指揮、たびたび再招聘されている。オペラではパリ・シャトレ座、ミラノ・スカラ座、フィレンツェ歌劇場などに登場。現代作品にも積極的に取り組んでいる。

John Axelrod is Principal Conductor of Bucharest Symphony. He was formerly Music Director and Chief Conductor of Luzerner Sinfonieorchester und Luzerner Theater, Music Director of Orchestre National des Pays de la Loire, Music Director of Royal Seville Symphony, Principal Guest Conductor of Orchestra Sinfonica di Milano Giuseppe Verdi, and Principal Guest Conductor of City of Kyoto Symphony. Axelrod has appeared with orchestras including Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks, Gewandhausorchester Leipzig, Orchestre de Paris, London Philharmonic, Orchestra dell'Accademia Nazionale di Santa Cecilia, Oslo Philharmonic, Los Angeles Philharmonic, Philadelphia Orchestra, and Chicago Symphony.



# 第986回 定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.986 C Series

Series

東京芸術劇場コンサートホール

2023年11月12日(日) 14:00開演

Sun. 12 November 2023, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre



# オーケストラ・キャラバン 小田原公演

Orchestra Caravan in Odawara

TMSO

小田原三の丸ホール 大ホール

2023年11月13日(月) 18:30開演

Mon. 13 November 2023, 18:30 at Odawara Sannomaru Hall

指揮 ● ジョン・アクセルロッド John AXELROD, Conductor

ヴァイオリン ● アレクサンドラ・コヌノヴァ Alexandra CONUNOVA, Violin

コンサートマスター ● 矢部達哉 Tatsuya YABE, Concertmaster

## シルヴェストロフ：沈黙の音楽 (2002) (11分)

Silvestrov: *Silent Music* (2002)

- |                             |          |
|-----------------------------|----------|
| I Waltz of Moment           | 瞬間のワルツ   |
| II Evening Serenade         | 夕べのセレナーデ |
| III Moments of the Serenade | セレナーデの瞬間 |

## シベリウス：ヴァイオリン協奏曲 二短調 op.47 (32分)

Sibelius: Violin Concerto in D minor, op.47

- I Allegro moderato
- II Adagio di molto
- III Allegro ma non tanto

休憩 / Intermission (20分)



## ショスタコーヴィチ：交響曲第5番 二短調 op.47 (46分)

Shostakovich: Symphony No.5 in D minor, op.47

- I Moderato
- II Allegretto
- III Largo
- IV Allegro non troppo


主催：公益社団法人日本オーケストラ連盟 (11/13)、公益財団法人東京都交響楽団、  
市民ホール文化事業実行委員会・小田原市 (11/13)

後援：東京都、東京都教育委員会 (11/12)

助成： 文化庁文化芸術振興費補助金  
 (舞台芸術等総合支援事業 (創造団体支援)) (11/12)  
 統括団体による文化芸術需要回復・地域活性化事業 (アートキャラバン2) (11/13)  
 独立行政法人日本芸術文化振興会

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演 (青少年と保護者をご招待) (11/12)

協賛企業・団体はP.59、募集はP.62をご覧ください。 



## Alexandra CONUNOVA

Violin

アレクサンドラ・コヌノヴァ

ヴァイオリン

2012年ハノーファー国際ヴァイオリン・コンクール優勝。第15回チャイコフスキー国際コンクール第3位。その優れた技巧、温かで色彩に富んだ音色で高い評価を得ている。2016年ボルレッティ=ブイトーニ財団フェローシップ賞受賞。これまでにパリ管、マーラー・チェンバー・オーケストラ、NDR北ドイツ放送フィル、スイス・ロマン管、マリンスキー劇場管、ロシア・ナショナル管などと共演、またサラステ、クルレンツィス、ノセダ、プレトニョフ、アクセルロッド、ノットらと共演を重ねている。ヴェルビエ、エクス=アン=プロヴァンス、フェラーラ、ツィナンドリなど数々の国際音楽祭にたびたび招かれている。録音ではアパルテよりリリースされた最新盤の『ヴィヴァルディ:四季』が『グラモフォン』誌に「温かな音色、縦横自在のテクニック、豊かな表現力、極めて自然な音楽づくり……素晴らしい一言に尽きる」と絶賛された。

First Prize at Internationaler Joseph Joachim Violinwettbewerb, Hannover in 2012, and prizewinner at XV International Tchaikovsky Competition in Moscow, Alexandra Conunova has been hailed by her virtuosity, warm tone, impressive range of color, and flawless technique. In 2016 she received the prestigious Fellowship by Borletti-Buittoni Trust. Recent highlights include engagements with Orchestre de Paris, Mahler Chamber Orchestra, NDR Radiophilharmonie, Orchestre de la Suisse Romande, Mariinsky Orchestra, among others under batons of Saraste, Currentzis, Nosedá, Pletnev, Axelrod, and Nott. Conunova is regularly invited to the most prestigious festivals, such as Verbier, Aix-en-Provence, Ferrara and Tsinalali. Her latest CD of Vivaldi's Four Seasons on Aparté, obtained rave reviews: "her playing is this fabulous: the warm-toned, easy fluidity of her virtuosities; her range of articulation, color, and shading; the subtle spontaneity; the natural shaping." (Gramophone)

## シルヴェストロフ： 沈黙の音楽

ヴァレンティン・シルヴェストロフ(1937～)は、現代のウクライナを代表する作曲家のひとりだ。キーウ音楽院でレフコ・レヴツキー(1889～1977)とボリス・リャトシンスキー(1895～1968)に学んだ彼は、1960年代、まず、西欧の新しい音楽の潮流の影響を受けた「キーウ・アヴァンギャルド」のメンバーとして前衛的な作品を発表し、注目された。しかしその後、彼は作風を大きく転換し、1970年代以降は、主として調性を用いたロマンティックな音楽を書くようになった。

ただ、旧ソ連において、シルヴェストロフの作品は1960年代から事実上演奏が禁止されていたため、ギドン・クレーメル(1947～)をはじめとする支持者たちが、主にソ連国外で演奏してはいたものの、知る人ぞ知る存在にとどまっていた。そんな彼の作品が国際的に広く知られるようになったのは、今世紀になって、シルヴェストロフの作品を収めたCDがECMレーベルから相次いで発売されてからのことだ。本日演奏される《沈黙の音楽》は、そのECMレーベルの創設者マンフレート・アイヒャー(1943～)に献呈されている。

さて、2022年2月24日に始まったロシアのウクライナ侵攻は、シルヴェストロフの運命も大きく変えた。侵攻開始から間もない翌3月、彼は家族とともにキーウの自宅を去り、ポーランドを経由してドイツへと亡命した。彼が2014年のマイダン革命(ウクライナ騒乱)の折に書いた無伴奏混声合唱曲《ウクライナへの祈り》は、ウクライナへの連帯を表明する作品として世界各地で演奏されるようになった。都響は、2022年4月21・22日に大野和士の指揮でこの曲の管弦楽版(アンドレアス・ジース編曲)を日本初演している。

2002年の作品《沈黙の音楽》は短い3曲からなり、各曲は「瞬間のワルツ(Waltz of Moment)」「夕べのセレナーデ(Evening Serenade)」「セレナーデの瞬間(Moments of the Serenade)」というタイトルを持っている。第1・3曲の「瞬間」は同じ単語だが、第1曲は単数形、第3曲は複数形だ。また、直訳すると「Silent Music = 静かな音楽」となるタイトル通り、3曲はほぼ弱音で書かれている。楽譜には大量の強弱記号が書き込まれているが、**f**や**mf**は第1曲冒頭の4小節に現れるのみで、あとはすべて**mp**から**ppp**だ。

第1曲「瞬間のワルツ」アレグロ ドルチッシモ、レツジェーロ、ロンターノ ト長調 ノスタルジックな雰囲気ワルツだが、テンポの変化が非常に頻繁に指定されているため、3拍子の律動感はほぼ感じられない。また、第1ヴァイオリンとチェロは最大3部、第2ヴァイオリンとヴィオラは2部に分割され、各パートには強弱の指示が細かく書き込まれ、繊細な響きを織りなしている。和声のうつろいはしばしばマーラーの交響曲第10番を連想させる。

第1曲と第2曲の最後にはフェルマータの付いた全休符があるが、そのあとにア

タッカ(休まずに続けて)の指示があり、緊張感を保持したまま次の曲に入る。

第2曲「夕べのセレナーデ」 モデラート コン・モト(ポコ・ルバート) 二短調

この曲では、すべてのパートが弱音器を付けて演奏する。ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第14番《月光》第1楽章を思わせる内声の分散和音で始まるが、第1ヴァイオリンが歌い始める主旋律は、シューベルトの歌曲集《白鳥の歌》の「セレナーデ」を換骨奪胎している。この楽章でもコントラバスを除く各パートが分割されているが、「セレナーデ」を歌い交わす第1・第2ヴァイオリンは基本的に分割されず、旋律を浮き上がらせている。

第3曲「セレナーデの瞬間」 ラルゲット コン・モト(ポコ・ルバート) ハ長調

第2曲と同様、すべてのパートが弱音器を付けて演奏する。主にチェロの担当する分散和音に乗せて、この楽章でもやはり分割された各パートが穏やかな旋律を繰り返す。4分の4拍子にときおり混じる4分の5拍子が、フレーズの終わりで立ち止まるような効果を作っている。

(増田良介)

作曲年代：2002年

初 演：第1曲／2002年9月18日 キーウ

第2・3曲／2003年10月3日 キーウ

ともにヴァレリ・マチューヒン指揮 キーウ・カメラータ

楽器編成：第1ヴァイオリン6、第2ヴァイオリン4、ヴィオラ4、チェロ3、コントラバス1

## シベリウス： ヴァイオリン協奏曲 二短調 op.47

1904年に発表されたジャン・シベリウス(1865～1957)のヴァイオリン協奏曲は、彼が残した唯一の協奏曲である。もともとヴァイオリニストを目指していたシベリウスは、この楽器の演奏技法や表現上の特性を全て知り尽くしていた。その彼が満身の力をこめて作曲したヴァイオリン協奏曲は、20世紀を代表する傑作協奏曲として、今や高い人気を博している。

シベリウスがヴァイオリン協奏曲に取り組んだきっかけは、友人アクセル・カルペラン(1858～1919)の進言である。交響曲第1番ホ短調op.39(1899／1900改訂)が国際的に評価され、続く第2番ニ長調op.43(1902)の大成功でシンフォニストとしての自信を深めていたシベリウスでも、協奏曲の創作は全く新たな挑戦だった。当時のシベリウスは、支配国ロシアの圧政に抵抗して高まりつつあったフィンランドの重苦しいナショナリズムから距離を置き、より清澄な作風に向かおうとしていた。おそらく彼はヴァイオリン協奏曲の創作を通して、これまでとは異なる表現世界の扉を開こうとしたのだろう。しかし、その挑戦の道のりは困難をきわめることになった。

最初の試練は1904年初頭に披露された初稿の大失敗である。その原因の一つとして、ソリストに急きよ抜擢されたヴィクトル・ノヴァチェク(1875～1914)の力不足を指摘する者もいる。だが鉛のように重々しい曲調や、演奏効果の乏しい独奏ヴァイオリンの超絶技巧にも見逃せない問題があった。それを自覚せざるをえなかったシベリウスは、初稿を封印して大幅な修正を加えることにする。より透明で峻厳な響きを求め、作品の内部構造にもメスを入れた改訂作業は大いに難航した。なお、その間にシベリウス一家は喧噪なヘルシンキを離れて、自然豊かなヤルヴェンパーに転居している。

改訂稿の初演はカレル・ハリール(1859～1909)をソリストに迎え、リヒャルト・シュトラウス(1864～1949)指揮ベルリン・フィルという豪華な陣容で、1905年秋に行われた。しかし、この改訂稿も名ヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒム(1831～1907)から「退屈で飽き飽きする」と酷評されてしまう。それでもジネット・ヌヴェー(1919～49)やヤツシャ・ハイフェッツ(1901～87)、ダヴィド・オイストラフ(1908～74)ら、多くのヴァイオリニストの尽力により協奏曲の真価が少しずつ認められると、その後広く世界中で演奏されるようになっていく。

**第1楽章 アレグロ・モデラート** 全楽章中もっとも長大で複雑な構成を持つ。ソナタ形式を下敷きにしてはいるが、独奏ヴァイオリンの精緻なカデンツァを展開部として配置するなど、シベリウス独自のデザインに基づいている。冒頭の主題が内包するドリア旋法(教会旋法の一つ)の要素が全体の響きに大きな影響を与えている。

**第2楽章 アダージョ・ディ・モルト** ロマンチック風の抒情的な緩徐楽章。神秘的な色彩を帯びている一方、曲の後半ではソリストの技巧的なパッセージが現れて緊迫した雰囲気になる。

**第3楽章 アレグロ・マ・ノン・タント** ソリストに圧倒的な力量を要求する躍動感に満ちたフィナーレ。性格のはっきりした2つの主題を軸にしなが、終始ダイナミックに高揚していく。

(神部 智)

作曲年代：1903～04年 1905年改訂

初 演：初稿／1904年2月8日 ヘルシンキ  
 ヴィクトル・ノヴァチェク独奏 作曲家指揮 ヘルシンキ・フィル  
 改訂稿／1905年10月19日 ベルリン  
 カレル・ハリール独奏 リヒャルト・シュトラウス指揮 ベルリン・フィル

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部、独奏ヴァイオリン

## ショスタコーヴィチ： 交響曲第5番 二短調 op.47

ドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906～75）の交響曲第5番は、彼の作品の中でももちろん、20世紀に書かれたすべての交響曲の中でも最もよく演奏される作品の一つだ。

1936年1月、ソ連共産党機関紙『プラウダ』（すなわちソ連当局）によって、ショスタコーヴィチの歌劇『ムツェンスク郡のマクベス夫人』が厳しく批判される。これによってショスタコーヴィチは、絶体絶命の危機に陥った。当時、最高指導者ヨシフ・スターリン（1878～1953）により、政治指導層はもちろん文化人も処刑／強制収容所へ送る大粛清が進行しており、文字通り生命の危険に直面したのである。

ショスタコーヴィチは、初演の準備がかなり進んでいた交響曲第4番を撤回する。そして新しく作曲したのがこの交響曲第5番だった。ベートーヴェン風の「苦悩から歓喜へ」という明快な構成をもち、輝かしい二長調のフィナーレで終わるこの曲の初演は大成功を収め、ショスタコーヴィチはこれにより、事実上の名誉回復を果たした。

なお、初演を指揮したエフゲニー・ムラヴィンスキー（1903～88）は、このときがショスタコーヴィチとの初めての出会いだったが、彼らはこの成功をきっかけに親交を結ぶ。以後、作曲者は彼を非常に信頼し、多くの作品の初演を任せた。

さて、作曲者の存命中は、社会主義の闘争と勝利を描いていると何となく思われていたこの曲だが、1980年代以降、実は重層的な意味のある作品だという考え方が広がる。現在も、ビゼーの歌劇『カルメン』や、自作の歌曲『復活』の引用などが手ごかりに、この曲の隠された意味を探ろうとする議論は絶えない。特に、作曲者がこの曲にスターリンに対する批判を込めたという考え方には支持者が多い。それは自然な考え方ではあるものの、その通りだと断定できるほどの手ごかりはまだ出ていない。

スターリンの死後に発表された交響曲第10番において、第2楽章は「スターリンの肖像」だとする説が一時期広まったが、実は思いをかけていた女性の名前が織り込まれていた（第3楽章）ことが書簡から判明した例もある。ショスタコーヴィチの音楽は一筋縄ではいかないのだ。

**第1楽章 モデラート** 自由なソナタ形式。主要主題は、弦合奏による重々しいカノンの序奏主題、第1ヴァイオリンの下降で始まる静かな第1主題、ビゼーの『カルメン』「ハバネラ」を思わせる第2主題（第1ヴァイオリンが提示）の3つ。提示部には他にもいくつかの主題が現れていて、展開部以降ではそれぞれに役割を果たす。

ピアノが登場し、ホルンが粗暴な行進曲のように第1主題を吹く箇所からが展開部だ。展開部では提示部の主題群を用いた暴力的なクライマックスが築かれる。再現部は、まず序奏主題が低音に反行形で現れ、次に第2主題によるカノン（フル



ートとホルン)となる。

**第2楽章 アレグレット** 3部形式のスケルツォ。交響曲第4番のスケルツォ楽章と同様、主部は、マーラー風の苦くグロテスクなユーモアが感じられる。ヴァイオリン独奏が活躍する中間部のあと、主部が戻ってくるときには主題がピッツィカートになっている。

**第3楽章 ラルゴ** 悲痛な雰囲気支配する緩徐楽章。複数の主題による変奏曲と見ることができるが、心細げに提示された主題が次に出てくるときには威圧的だったり、あるいはその逆だったり、さまざまな工夫がこらされている。金管楽器はまったく使わず、弦は、ヴァイオリンを3群、ヴィオラとチェロを各2群に分割し、繊細な響きを作り出している。ハープやチェレスタの使い方も効果的だ。

**第4楽章 アレグロ・ノン・トロポ** 自由な形式のフィナーレ。急-緩-急の3部分に分かれる。まず、ティンパニが4度音程を打ち鳴らし、トランペットとトロンボーンが行進曲風の力強い主題を吹く。これが次第にテンポを上げながら頂点に達すると、突然失速し、静かでゆっくりとした第2部に入る。しばらく物思いにふけるような音楽が続くが、やがて再び静かに行進曲のリズムが始まり、冒頭の主題が復帰すると第3部となる。ほぼ短調で進んでいくが、最後の最後で二長調となり、少なくとも表面上は輝かしい終結に至る。

なお、楽章冒頭の「ラレミファ」という音型と、第2部の最後に出てくるハープの音型は、この曲と同時期に書かれた《プーシキンの詩による4つのロマンス》op.46に含まれる歌曲「復活」の引用とされる。「野蛮人が画家の絵をでたらめに塗りつぶすが、やがてそれは剥がれ、もとの美が姿を現すだろう」というこの歌曲の内容は、作曲者の受けた批判に対する抗議と見なすこともできる。

(増田良介)

作曲年代：1937年4月18日～7月20日

初演：1937年11月21日 レニングラード

エフゲニー・ムラヴィンスキー指揮 レニングラード・フィル

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、小クラリネット、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タムタム、グロッケンシュピール、シロフォン、ハープ2、ピアノ(チェレスタ持替)、弦楽5部

Program notes by Robert Markow

## Silvestrov:

### *Stille Musik* (Silent Music) (2002)

I Walzer des Augenblicks (Waltz of Moment)

II Abendserenade (Evening Serenade)

III Augenblicke der Serenade (Moments of the Serenade)

Valentin Silvestrov: Born in Kyiv, Ukraine, September 30, 1937; now living in Berlin

What do Sergei Prokofiev, Karol Szymanowski, Igor Markevitch, and Reingold Glière have in common? They were all composers born in Ukraine but left soon after for other lands. Silvestrov too was born in Ukraine, but he stayed. He would be there still if the Russians hadn't invaded his country last year (he now lives in Berlin). As such, he stands at the age of 86 as Ukraine's best-known living composer. In 1995 he won the Shevchenko National Prize, his country's highest award for an artist.

Silvestrov was born during the period of the Soviet government's most oppressive stance against artists. He refused to conform to Party dictates, and as a result his music was slow in attracting international attention. Fortunately, that situation has changed. His catalogue includes nine symphonies composed across the span of more than half a century (1963 to 2019) as well as many works for piano and for various chamber ensembles.

Much of Silvestrov's music reflects the unhappy artistic environment in which he lived.

His catalogue is filled with titles like Requiem, Hymn, Lacrimosa, Meditation, Prayer, and Epitaph. Elegy is one of his favorite genres. Much of his recent music has a reposed, consoling, spiritual quality to it. Critic Robert Carl described him as "a connoisseur of nostalgia but not of sentimentality." Such is the eleven-minute *Silent Music*, one of Silvestrov's most frequently performed works. To Carl, it "positively drips with *fin de siècle* world-weariness." *Silent Music* was composed in 2002 as a present for Manfred Eicher, founder of the ECM label, which has recorded many of Silvestrov's works, including *Silent Music*. The world premiere took place in two stages: the first movement on September 18, 2002; the second and third on October 3, 2003. For both events, Valeri Matjuchin conducted the Kyjivska Kamerata in Kyiv.

The three short movements are played without pause. Each explores a single melodic idea in a musical landscape aching with melancholy and deep intimacy, often suggesting smiling through the tears. The performance directions *dolce* (sweetly) and *dolcissimo* (very sweetly) occur frequently, mutes are often in use, and the overall dynamic level is subdued. There is a single *forte* in the opening bar; thereafter we find only shades of *piano*, from *pianississimo* (*ppp*) to *mezzo-piano* (*mp*).

# Sibelius:

## Violin Concerto in D minor, op.47

**I Allegro moderato**

**II Adagio di molto**

**III Allegro ma non tanto**

Jean Sibelius: Born in Hämeenlinna (Tavastehus), Finland, December 8, 1865; died in Järvenpää (near Helsinki), September 20, 1957

In 1902, the German violinist Willy Burmester asked Sibelius to write him a concerto. When Sibelius sent him the piano reduction of the first two movements in September of 1903, Burmester was enthusiastic and suggested the premiere be given in Berlin in March of 1904. But Sibelius had other ideas. Due to strained financial circumstances, he wanted the concerto performed as soon as possible, and secretly asked another violinist to give the premiere in Helsinki at an earlier date. What Sibelius got in the end was a far inferior soloist (a local teacher named Viktor Nováček, who never did learn the concerto properly), a cool reception at the premiere (February 8, 1904), mostly negative reviews in the press, and the justifiable resentment of Burmester.

Following the premiere, the concerto was put aside for over a year until Sibelius got around to revising it. He toned down some of the overtly virtuosic passages, tightened the structure of the outer movements and altered the orchestration of numerous passages. The revisions amount to far more than mere window dressing, and the results are fascinating to compare with the original.

On October 19, 1905, the concerto received its premiere in the final form in Berlin, with Karl Halir as soloist and none other than Richard Strauss on the podium. Shortly afterwards, Sibelius' friend Rosa Newmarch told him that "in fifty years' time, your concerto will be as much a classic as those of Beethoven, Brahms and Tchaikovsky." How right she was!

Sibelius' affinity for the violin stemmed from his youth, when he aspired to become a great violinist. "My tragedy," he wrote, "was that I wanted to be a celebrated violinist at any price. From the age of fifteen, I played my violin for ten years, practicing from morning to night. I hated pen and ink. ... My preference for the violin lasted quite long, and it was a very painful awakening when I had to admit that I had begun my training for the exacting career of an eminent performer too late." His very first composition (*Vattendroppar*), written at the age of eight or nine, was a piece for violin and cello. Although he left just one violin concerto, he also composed numerous short pieces for the instrument, mostly with piano.

The solo part is one of the most difficult in the entire repertory. Virtuosic passages abound, but they are welded to disciplined musical thought; there is no empty display material here. The orchestral writing bears much evidence of

Sibelius' deep interest in this medium, and serves a far greater purpose than a mere backdrop for the soloist. Dark, somber colors predominate, as is this composer's tendency, lending an air of passionate urgency to the music. Note particularly the third theme in B-flat minor in the first movement, played by the unison violins, or the second theme of the Finale, again played by the violins, with its interplay of 6/8 and 3/4 meters.

Attention to the formalities of sonata form is largely avoided in favor of originality of thought. In the first movement, there is no development section as such; instead, each of the three main themes is fully elaborated and developed upon initial presentation. A cadenza occurs at the point where a full development would normally stand, followed by a recapitulation of the three themes, each of which is subjected to further expansion. In the *Adagio* movement, Sibelius contrasts the long, dreamy and reflective opening theme with a turbulent and darkly passionate section in the minor mode. The finale, in rondo form, calls to the fore the full technical prowess of the soloist. Energetic rhythms suggestive of the polonaise and gypsy dances offer further elements of excitement to this exuberant movement.

## Shostakovich: Symphony No.5 in D minor, op.47

**I Moderato**

**II Allegretto**

**III Largo**

**IV Allegro non troppo**

Dmitri Shostakovich: Born in St. Petersburg, September 25, 1906; died in Moscow, August 9, 1975

Many of the works we today hail as masterpieces suffered difficult birth pangs. But Shostakovich's Fifth Symphony sprang into the world fully accepted. In this case, there is a double irony, for the composer managed to please two entirely different, in fact, diametrically opposed, ideological fronts simultaneously, right from the symphony's premiere on November 21, 1937 in Leningrad (today St. Petersburg again): 1) Soviet officialdom, which was demanding from Shostakovich music free of "formalistic perversion," that is, music easily intelligible to the Soviet masses; 2) those who believed in the mandate for a creative artist to produce only according to the dictates of his esthetic impulses and personal convictions.

Shostakovich subtitled his symphony "A Soviet Artist's Reply to Just Criticism" as a palliative to the heavy-handed government critics who had mercilessly railed at his opera *Lady Macbeth of Mtsensk* and other works. Further for the benefit of

Soviet officialdom, Shostakovich claimed that the symphony had as its theme “the making of a man. ... The finale is the optimistic solution of the tragically tense moments of the first movement.”

Government officials swallowed the hypocrisy. The composer’s true feelings were revealed to the public, at least in the West, only years later: “I never thought about any exultant finales, for what exultation could there be? The rejoicing is forced, created under threat.” Occupying a middle ground between the forces of the exhilarated and the bitter we might simply take the traditional romantic view of a big symphony as a generalized portrayal of conflict and struggle leading to triumph, as seen in such works as the Fifth Symphonies of Beethoven, Tchaikovsky and Mahler.

Needless to say, one is free to accept or reject any or all of these interpretations, and to listen to the symphony only as an abstract configuration of purely musical components.

The work abounds in extended but easily recognizable and memorable themes that lend themselves to fragmentation and development. There are passages of haunting beauty (the closing pages of the first movement especially, described by one writer as “strange spatial loneliness” ); pressing intensity (the inexorable build-up to the climax of the third movement); mordant wit (the cumbersome, grotesquely ponderous effect of the opening of the second movement, set off by squealy high woodwinds a moment later); strident militarism (the sardonic march in the first movement or the principal theme of the finale); and an almost unlimited number of imaginative and inventive orchestral effects: fanfares, extremes of range (the finale’s coda begins with horns in unison playing the lowest note but one in the entire repertory for that instrument), prominent use of piano and celesta, wide leaps with mischievous effects, unexpected contrasts of high/low and loud/soft, and chamber-music delicacy contrasted with massive *tuttis*.

Regardless then of the ideological, philosophical, or musical preconceptions and attitudes one brings to bear on Shostakovich’s Fifth Symphony, the music has shown itself capable of both absorbing and transcending them all, and in so doing, has secured for itself a secure niche in the pantheon of the world’s greatest and most popular symphonies.

**For a profile of Robert Markow, see page 12.**

11/24

# Kazuhiro KOIZUMI

Honorary Conductor for Life

小泉和裕  
終身名誉指揮者



© 堀田力丸

東京藝術大学を経てベルリン芸術大学に学ぶ。1973年カラヤン国際指揮者コンクール第1位。これまでにベルリン・フィル、ウィーン・フィル、バイエルン放送響、ミュンヘン・フィル、フランス放送フィル、ロイヤル・フィル、シカゴ響、ボストン響、デトロイト響、シンシナティ響、トロント響、モントリオール響などへ客演。新日本フィル音楽監督（1975～79）、ウィニペグ響音楽監督（1983～89）、都響指揮者（1986～89）／首席指揮者（1995～98）／首席客演指揮者（1998～2008）／レジデント・コンダクター（2008～13）、九響首席指揮者（1989～96）、日本センチュリー響首席客演指揮者（1992～95）／首席指揮者（2003～08）／音楽監督（2008～13）、仙台フィル首席客演指揮者（2006～18）、名古屋フィル音楽監督（2016～23）などを歴任。

現在、都響終身名誉指揮者、九響音楽監督、名古屋フィル名誉音楽監督、神奈川フィル特別客演指揮者を務めている。

Kazuhiro Koizumi studied at Tokyo University of the Arts and at Universität der Künste Berlin. After winning the 1st prize at Karajan International Conducting Competition in 1973, he has appeared with Berliner Philharmoniker, Wiener Philharmoniker, Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks, Orchestre philharmonique de Radio France, Chicago Symphony, Boston Symphony, and Orchestre symphonique de Montréal, among others. Currently, he serves as Honorary Conductor for Life of TMSO, Music Director of Kyushu Symphony, Honorary Music Director of Nagoya Philharmonic, and Special Guest Conductor of Kanagawa Philharmonic.



# 第987回 定期演奏会Aシリーズ

Subscription Concert No.987 A Series

東京文化会館

2023年11月24日(金) 19:00開演

Fri. 24 November 2023, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

指揮 ● 小泉和裕 Kazuhiro KOIZUMI, Conductor

ピアノ ● イノン・バルナタン Inon BARNATAN, Piano

ゲスト・コンサートマスター ● 水谷 晃 Akira MIZUTANI, Guest Concertmaster

## チャイコフスキー：ピアノ協奏曲第1番 変ロ短調 op.23 (32分)

Tchaikovsky: Piano Concerto No.1 in B-flat minor, op.23

I Allegro non troppo e molto maestoso - Allegro con spirito

II Andantino semplice

III Allegro con fuoco

休憩 / Intermission (20分)

## プロコフィエフ：交響曲第5番 変ロ長調 op.100 (43分)

Prokofiev: Symphony No.5 in B-flat major, op.100

I Andante


II Allegro marcato


III Adagio

IV Allegro giocoso

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

助成： 文化庁文化芸術振興費補助金  
(舞台芸術等総合支援事業 (創造団体支援))

 独立行政法人日本芸術文化振興会

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。



## Inon BARNATAN

Piano

イノン・バルナタン

ピアノ

©Marco Borggreve

1979年テルアビブ（イスラエル）生まれ、現在はニューヨーク市在住。2014年から3シーズンにわたってニューヨーク・フィルのアーティスト・イン・アソシエーションを務めた。これまでにクリーヴランド管、フィラデルフィア管、ロサンゼルス・フィル、サンフランシスコ響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、NDRエルプフィル、ベルリン・ドイツ響、フランス国立管、スイス・ロマンド管、ロンドン・フィル、イスラエル・フィルなどと共演。カーネギーホール、ウイグモアホール、コンサートヘボウなどでリサイタルを行った。

CDはいずれも高く評価され、アラン・ギルバート指揮アカデミー室内管との『ベートーヴェン：ピアノ協奏曲全集』（PentaTone Classics）も話題を呼んだ。2019年よりカリフォルニアのラ・ホーヤ音楽協会が主催するサマーフェストの音楽監督を務めている。都響とは2016年1月に初共演、今回が3度目の共演。

Inon Barnatan was born in Tel Aviv in 1979, resident in New York City. He served as Artist-in-Association of New York Philharmonic for three seasons from 2014. Barnatan has performed with orchestras including Cleveland Orchestra, Philadelphia Orchestra, Gewandhausorchester Leipzig, NDR Elbphilharmonie Orchester, Deutsche Symphonie-Orchester Berlin, Orchestre national de France, Orchestre de la Suisse Romande, London Philharmonic, and Israel Philharmonic. His CDs are highly acclaimed; the recent recording of the complete Beethoven piano concertos with Alan Gilbert and the Academy of St. Martin in the Fields attracted much attention around the world. Barnatan is serving as Music Director of La Jolla Music Society's SummerFest in California from 2019.



## チャイコフスキー： ピアノ協奏曲第1番 変ロ短調 op.23

1862年、ロシア初の本格的な音楽院であるペテルブルク音楽院がアントン・ルビンシテイン(1829～94)によって設立された。ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840～93)はこの音楽院創立時に入学し、アントンの指導を受けた。1866年、今度はモスクワに音楽院が開設される。創立者はアントンの弟で名ピアニストのニコライ・ルビンシテイン(1835～81)だった。前年ペテルブルク音楽院を卒業したチャイコフスキーはこのモスクワ音楽院に教師として赴任する。ニコライは当初彼を自分の家に寄宿させるなど、新米教師・新進作曲家である彼に助力を惜しまなかった。

ピアノ協奏曲第1番はこの恩人ニコライに捧げるべく、1874年秋に着手された。弟アナトリー(1850～1915)宛の手紙でもチャイコフスキーはこの曲をニコライに弾いてもらうために書いていることを述べている。そしてピアノ譜が大方仕上がった年末に、曲に対する意見をニコライに求めた。ニコライの返答は予想もしなかったものだった。「演奏不能の代物」「陳腐で低俗」「大部分は書き直すべき」などと罵詈雑言、さすがのチャイコフスキーも怒りを抑えきれず「一音たりとも変えない」と応酬したという。

翌1875年初めにオーケストレーションを完成させたチャイコフスキーは、音楽院の同僚カール・クリントヴォルト(1830～1916)の助言もあって、ドイツの名ピアニストで指揮者のハンス・フォン・ビューロー(1830～94)に楽譜を贈った。「全ての点で讃嘆に値する」と絶賛したビューローは同年秋のアメリカ演奏旅行中、ボストンでこの曲を弾いて初演し大成功を収め、ニューヨークなどでもこれを演奏して好評を得る。

ロシア初演は1875年11月にペテルブルクでなされ(独奏はG.クロス)、続いてモスクワ初演もなされた。モスクワ初演の独奏はセルゲイ・タネーエフ(1856～1915)だったが、指揮はなんとこの曲を酷評したニコライ・ルビンシテインが受け持った。ニコライも認識を改め、1878年にピアニストとしてこの曲をモスクワで取り上げ、さらに同年のパリ万博でも演奏している。チャイコフスキーものちに改訂に乗り出し、決定稿を作り上げたのだった。

民族色豊かなこの作品は、協奏曲の伝統から外れた新しい様式が打ち出されている。例えば第1楽章は力強いホルンに導かれて、広がりある主題が現れる。いかにも楽章全体の第1主題と見まがうこの主題は、実は単なる序奏主題で、ただ一度ここでしか出現しない。主部との密接な主題的関連を重視する伝統的な作法とは違った独創的発想であり、当初ニコライが理解できなかったのも無理はないともいえよう。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo・エ・モルト・マエストーソ(変ニ長調)～

アレグロ・コン・スピリト（変口短調） 上述の主題を持つ規模の大きな序奏が置かれる。主部はウクライナ民謡を変化させた第1主題に始まるソナタ形式だが、ラプソディー風の性格が強い。ピアノの名技とシンフォニックな響きの管弦楽の絡みが聴きものだ。

第2楽章 アンダンティーノ・センブリーチェ 変ニ長調 ロシアの風景を映し出すようなフルートの美しい主題に始まる情感豊かな緩徐楽章。プレスティッシモに転じる中間部は、一時期チャイコフスキーが恋した歌手デジレ・アルトー（1835～1907）が愛唱したフランスの小唄を主題とする。

第3楽章 アレグロ・コン・フォーコ 変口短調 ウクライナ民謡に基づく民俗舞曲風の主題を持ったロンドで、ピアノの技巧性を生かしつつ圧倒的な高揚を作り出していく。

（寺西基之）

作曲年代：1874～75年 改訂／1879年、1888～89年

初 演：1875年10月25日（ロシア旧暦13日） ポストン  
ハンス・フォン・ビューロー独奏

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

## プロコフィエフ： 交響曲第5番 変口長調 op.100

1918年以降西欧で活動していた時期に3曲の斬新な交響曲（第2～4番）を生み出したセルゲイ・プロコフィエフ（1891～1953）だが、1930年代半ばにソヴィエト体制の母国に復帰後はしばらく交響曲から離れ、主に舞台作品や声楽作品などに力を入れる。ソ連では社会主義リアリズムの文化政策が打ち出されており、彼は自分の個性をそうした路線の中でいかに生かしていくか探る必要があった。そうした時期においては、絶対音楽の中でも最も構成的なジャンルの交響曲よりも、具体的な題材に基づく舞台作品や声楽曲のほうが、ソ連で作曲家として認められるための自己アピールがしやすかったのかもしれない。

プロコフィエフが交響曲の作曲を決意するのは、帰国後約10年もたった1944年のことだった。《戦争ソナタ》と呼ばれるピアノ・ソナタ3部作の最後であるソナタ第8番を完成した年で、第2次世界大戦（1939～45）の終結への光が見え始める中で偉大な仕事に取り組もうという思いで交響曲に着手したという。こうして生み出された第5交響曲は、帰国後様々なジャンルで培ってきた彼の書法を伝統的な4楽章構成の交響曲の形の中に見事に融け込ませた傑作として結実した。

作曲家自身によれば「自由で幸福な人間とその強大な力、その純粹で高貴な精神」を表現したというこの交響曲は、たしかに全体に叙情的な明るさが支配的だが、

その中にシニカルな諧謔性、不気味な緊張感が複雑に交錯する。戦時の厳しい状況を経験した一方で、スターリン独裁の怖さも作曲家として身にしみて感じようになっていたプロコフィエフが、久々に手掛ける交響曲でどのような思いを表現しようとしたのか、この作品にはいろいろな解釈が可能だろう。

初演は1945年1月13日にモスクワ音楽院大ホールでなされた。指揮は作曲家自身で、演奏が開始される直前に対ドイツの戦闘勝利の祝砲が鳴り響き、それが終わったところでタクトが振りおろされたという。その模様はソヴィエト各地に中継放送された。

**第1楽章 アンダンテ 変ロ長調 ソナタ形式** 2つの主要主題はいずれも伸びやかな叙情的性格を持つ。低弦による主調の第1主題で始まる展開部は既出の楽想を活用しつつ次第に盛り上がっていき、その頂点で金管に第1主題が現れて再現部へ入る。打楽器群を活用した終結は壮大だ。

**第2楽章 アレグロ・マルカート ニ短調** 軽妙かつシニカルなスケルツォ楽章。中間部はバレエ音楽を思わせる。主部再現は機関車の発進のように加速度的に始まり、第1部より厚みを増しつつ興奮を高める。

**第3楽章 アダージョ ヘ長調** 深い情趣を湛えた緩徐楽章で、主部では息の長い旋律が切々と歌われる。中間部は深い陰りを持ち、やがて悲劇的な頂点を築く。

**第4楽章 アレグロ・ジョコーソ 変ロ長調** 第1楽章第1主題が回想される牧歌的な序奏の後、クラリネットが示す軽やかな主題を中心に幾つかの主題や楽想を挟みつつロンド風に明るく発展する。最後は祝典的で賑やかなコーダに至るが、その中に鋭い威嚇するような響きが入り混じるのが意味深長だ。

(寺西基之)

作曲年代：1944年

初 演：1945年1月13日 モスクワ 作曲家指揮

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、小クラリネット、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タンブリン、ウッドブロック、タムタム、ハープ、ピアノ、弦楽5部

Program notes by Robert Markow

## Tchaikovsky: Piano Concerto No.1 in B-flat minor, op.23

- I **Allegro non troppo e molto maestoso - Allegro con spirito**
- II **Andantino semplice**
- III **Allegro con fuoco**

Piotr Ilyich Tchaikovsky: Born in Votkinsk, May 7, 1840; died in St. Petersburg, November 6, 1893

On Christmas Eve, 1874, Tchaikovsky sat before his friend, the conductor and pianist Nicolai Rubinstein, at the Moscow Conservatory to play for him the piano concerto he had almost completed. “I played the first movement. Not a single remark! ... Then a torrent poured forth from Nicolai, gentle at first, then growing more and more into the sound of Jupiter ... my concerto was worthless and unplayable ... so clumsy, so badly written that it was beyond rescue.”

Tchaikovsky’s description goes on at great length. Obviously, he was insulted and deeply hurt, but resolved to publish the concerto anyway. As a result of the bad feelings between Rubinstein and the composer, the dedication was changed to Hans von Bülow, who performed it on a tour of the United States. The world premiere, on October 25, 1875, took place, then, not in Russia, but in Boston, from where Bülow sent what is thought to have been the first cable ever sent from Boston to Moscow, telling Tchaikovsky of the great popular success of his concerto.

Strange as it may seem, the critics did not agree with the public acclamation. The *Evening Transcript* thought it had “long stretches of what seems ... formless void, sprinkled only with tinklings of the piano and snatchy *obbligatos* from all the various wind and string instruments in turn.” The *Journal* was confident that “it would not soon supplant ... the fiery compositions of Liszt, Raff and [Anton] Rubinstein,” and *Dwight’s Journal of Music* found it “strange, wild, and ultra-modern,” and wondered “could we ever learn to love such music?” History has decided resolutely in favor of the question, and the work went on to become the world’s most popular piano concerto. Tchaikovsky’s original confidence had borne fruit. Even Nicolai Rubinstein changed his mind in later years, and performed the concerto often. Tchaikovsky too capitulated by accepting some of the pianist’s suggestions for revisions.

Each of the three movements has its unique charms and attractions. The concerto’s most famous theme – that beautiful, lyrical song played by violins and cellos just after the opening horn fanfare – is used as introductory material only, and after it has run its course of development through various instruments, never returns. This theme, incidentally, occurs in the key of D-flat major, not the main key of the concerto (B-flat minor). The first movement’s true principal subject in that key is a jerky, almost tuneless idea introduced by the soloist. Its essentially Russian folk character can be detected if the individual pitches are sung slowly. This melody is actually adapted from a song the composer heard rendered by a blind beggar at a village fair.

The dreamy flute solo that opens the second movement also exudes a folksy flavor, but in this case it is entirely Tchaikovsky's own. This slow movement incorporates what is in essence a miniature Scherzo movement – a *prestissimo* passage of whimsical, lighthearted fun. It features a lilting tune in the strings that Tchaikovsky borrowed from a French *chansonnette*.

The finale offers the most brilliant virtuosic opportunities yet, and concludes with the soloist roaring his way up and down the keyboard in a stunning display of pianistic pyrotechnics.

## Prokofiev: Symphony No.5 in B-flat major, op.100

**I Andante**

**II Allegro marcato**

**III Adagio**

**IV Allegro giocoso**

Sergei Prokofiev: Born in Sontsovka (today Sontsivka), District of Ekaterinoslav, Ukraine, April 27, 1891; died in Moscow, March 5, 1953

Prokofiev spent the summer of 1944 at an estate outside Moscow especially allocated to members of the Soviet Composers' Union. Here, amid nature, peace and tranquility, undisturbed by the harsh realities of war elsewhere, he composed the entire score of the longest (nearly fifty minutes) of his seven symphonies. It was written in just one month and orchestrated in an equally short time. The first performance was given by the Moscow State Philharmonic Orchestra on January 13, 1945, led by the composer. It was a momentous event. Not only did it mark the crowning public achievement of the composer; just a day earlier, the Russian army began its final push to eventual victory over the invading German forces, and just before the concert began, news arrived that the Russians had won a victory at the Vistula River. According to biographer Israel Nestyev, "the opening bars of the symphony were heard against the thunderous background of an artillery salute. Prokofiev's compelling music perfectly suited the mood of the audience." The following year the symphony won a Stalin Prize, First Class. The symphony's premiere marked Prokofiev's last appearance as a conductor. Thereafter, physically his health declined, and mentally he, along with other artists (including Shostakovich) was subjected in 1948 to the infamous, brutal attacks by the government for his "formalist" writing.

Prokofiev had not produced a symphony since 1930 – fourteen years – possibly since none of them except the atypical *Classical* Symphony (No. 1) had been truly successful. Having voluntarily returned to Russia permanently in 1933 after years of living abroad, Prokofiev appeared willing to comply with governmental pressures to write patriotic, ideological music. Hence, we find him explaining the purpose of the Fifth Symphony, written amidst the horrors and suffering of World

War II, as “a hymn to free and happy Man, to his mighty powers, his pure and noble spirit.” We also find a softening of the raw dissonances, the biting sarcasms and the bizarre features that so vividly characterized his music of pre-1933. Themes are now predominantly of a lyrical cast, large-scale works bear close resemblance to traditional forms, harmony is more diatonic, the moods are gentler. Among the works written in the fourteen-year period since the Fourth Symphony are the ballet *Romeo and Juliet*, the cantata *Alexander Nevsky*, *Peter and the Wolf*, *Lieutenant Kijé* and the Second Violin Concerto.

The first movement is laid out in traditional form with exposition, development, recapitulation and coda. The tempo marking is *Andante*, though the movement does not feel like a “slow” one. “Broad” and “expansive” would be more to the point. There are no fewer than five well-defined themes or motifs. The two principal ideas are both heard initially by a pair of woodwinds an octave apart: the first for flute and bassoon in the opening bars, the second for flute and oboe a bit later. Both are in a decidedly lyrical vein. Alternating with these are more rhythmically sturdy and more heavily scored ideas. Finally comes a skittish little gesture in the violins. All five ideas are worked out in the extensive development section, which culminates in a grandiose restatement of the movement’s opening theme. All subsequent themes then return in original sequence. The coda is one of the symphony’s most memorable passages. Lasting 36 bars in slow tempo, and at the upper end of the dynamic range nearly throughout, the texture is of extreme density and crushing weight. Although it is fiercely dissonant, it nevertheless made a highly favorable impression on its first audience. According to Nestyev, it is “perhaps the most impressive episode of the entire symphony, for it embodies with the greatest clarity the work’s highest purpose – glorification of the strength and beauty of the human spirit.”

The second movement, playful, teasing, and sardonic by turns, presents a theme that flits about from instrument to instrument 36 times, each one modified in some way. The calmer, central portion has its own theme.

The powerfully eloquent third movement, like the second, is cast in ternary form (ABA) and, like the first, reveals Prokofiev’s lyricism in full bloom. The elegiac first theme is, like many others in this symphony, scored for a pair of instruments in parallel writing (here for clarinet and bass clarinet at a distance of two octaves). The second theme rises from the depths of the orchestra (bassoons, tuba, low horns, double basses) through a soaring line that spans three octaves. The coda quietly presents a new theme for the unlikely combination of piccolo and horns.

After a brief prelude, which contains reminiscences of the first movement, the finale’s swaggering principal theme is played by the clarinet accompanied by an *ostinato* pattern in the horns. Three more distinct themes follow. Fun, satire, wit, and energy infuse this movement, which is for the most part merry and capricious, though not without its moments of menace and even brutality. This movement too concludes with a coda, a high-powered affair with electrifying effects from the trumpets, high woodwinds, and percussion department.

**For a profile of Robert Markow, see page 12.**